

堅田と比良山麓の村々

解説シートの太字の言葉の中から、興味のあるものを選んで調べてみましょう。

展示のポイント

堅田の位置をまず地図で確かめてみましょう。琵琶湖が一番狭くなっている所の西側に位置しています。この立地によって、堅田は特徴的な歴史を刻んできました。それは、琵琶湖の船を支配することでした。自動車や鉄道が生まれる以前の社会では、人や物を運ぶのに最も便利な手段が船でした。日本は、古くから海や川、湖を使った船の利用が盛んでした。中でも京都に近く、日本最大の湖であった琵琶湖は、物を運ぶための船がたくさん行き来する湖だったのです。そして、これらの船を監視するのに最も適した場所が堅田でした。このコーナーでは、琵琶湖と共に歩んできた堅田について考えてみることにしましょう。また、堅田から北の比良山麓の村々についても見ていくことにします。



① 堅田の町並み

室町時代後期の堅田を描いた絵を元につくりました。堅田が大きな力を持っていた時期に当たります。

浮御堂近くの民家と、少し離れた民家では、屋根に違いがあります。どのように違っていますか。なぜ違うのかも考えてみましょう。

(答えは模型の前の解説パネルにあります)

1 堅田の町の特徴を、模型の中から探してみよう



(1) 浮御堂

湖に飛び出した建物が、堅田のシンボル・浮御堂です。平安時代の比叡山の僧侶・恵心僧都源信が、湖で活動する人々の安全を祈って建てたといわれています。雄大な琵琶湖に浮かぶお堂の姿は美しく「近江八景 堅田落雁」の絵に必ず登場します。常設展示「近江八景」のコーナーで確かめてみましょう。

また、江戸時代には松尾芭蕉も訪れ、俳句を詠んでいるほか、多くの人々がこの絶景を愛でました。

模型の浮御堂と現在の浮御堂を比べてみてください。どこが違うでしょうか？



(2) 堅田の漁業

堅田は漁業も盛んでした。湖岸のヨシ原には、小さな小屋が建っています。そこで網をたらず人が見えます。これは四ツ手網といって、湖岸に寄ってくる魚を捕まえる漁法で、現在、堅田では見られません。模型の後ろにある堅田を描いた絵には、沖合で魚を捕る様子も見えます。

🎵 漁業以外では、荷物を運ぶ船も描かれています。船にはどのような役割があったかを調べてみましょう。

2 琵琶湖独特の木造船 丸子船（丸船）

室町時代後期（模型で復元した時代）、琵琶湖にどのような形の船が浮かんでいたかはよくわかっていませんが、江戸時代には、琵琶湖独特の木造船、「丸子船（丸船）」が浮かんでいました。

その特徴は、板を斜めに並べて船の先端を作るヘイタと、船の側面にオモギと呼ばれる丸太を半分にした大きな部材が取り付けられていることです。この丸子船を、琵琶湖のそれぞれの港がどれくらい持っていたかを展示で紹介しています。



🎵 どの港にたくさんの船があったか調べてみましょう。
また、その理由もあわせて考えてみましょう。

3 蓮如と一休

琵琶湖を行き来する船を支配し、大きな力を持っていた室町時代の堅田は、周囲から独立した自治都市でした。この堅田の力を頼って、京都を追われた浄土真宗中興の祖・蓮如が、本福寺を拠点に活動したほか、禅宗の祥瑞寺では若き日の一休が修行しています。



📍 蓮如が拠点とした本福寺
(本堅田一丁目)



📍 一休が修行した祥瑞寺
(本堅田一丁目)

4 比良山麓の村々



高い山がそびえる比良山麓の村々では、山での仕事も盛んでした。急な山からたきぎや木材をおろすのに利用されたのが、トンボ車です。車軸と玉が分解でき、登るときは部品をバラバラに持って行きます。山で仕事をして、荷物ができると、トンボ車を組み立ててその上に乗せ、下りました。

📍 トンボ車 (本館所蔵)

比叡とその山麓

解説シートの太字の言葉の中から、興味のあるものを選んで調べてみましょう。

展示のポイント

788年（延暦7年）、伝教大師最澄は比叡山に上り、薬師如来を本尊とした一乗止観院（現在の延暦寺根本中堂）を建てました。これが比叡山延暦寺の始まりとされています。また、最澄は中国の天台山国清寺にならい、日吉社（現日吉大社）に祀られていた神々を延暦寺の守り神としました。これら延暦寺・日吉社の門前町として発展してきたのが、比叡山の麓に位置する坂本の町です。このコーナーでは、江戸時代の坂本の町並みを再現した模型を中心に、比叡山の長い歴史を紹介しています。現地には、「里坊」や「作り道」をはじめ、今でも古い町並みが残されていますので、実際に訪れてみてはいかがでしょうか。



江戸時代の坂本の町並み

坂本は延暦寺・日吉大社の門前町として栄え、今でも里坊が数多く残っています。

1 坂本の町並み

(1) 生源寺

写真右にあるのが生源寺です。ここは、最澄の父である三津首百枝の住んでいた家の跡といわれています。最澄は坂本で生まれ、このお寺の井戸水を産湯に使ったという伝説があります。

(2) 里坊

かつて比叡山で修業していた僧侶は、山の上と下にそれぞれ坊を持っていました。山の上にある坊を「山坊」と呼び、山の下にある坊を「里坊」と呼びます。この里坊が今も坂本の町には数多く残っています。

(3) 日吉馬場

石鳥居から山手を「日吉馬場」といい、日吉大社への参道であると同時に延暦寺への参拝道にもつながっています。道の両脇には桜が多く、春の山王祭では、祭礼行列や神輿が桜並木の中を華やかに進みます。道の両端には石垣で囲まれた里坊が建ち並んでおり、坂本の最も特徴的な町並みになっています。

(4) 作り道

生源寺から南に伸びる道で、福成神社の角までをいいます。かつて、延暦寺へ参拝する人たちの旅館や、比叡山の暮らしを支えるお店が、この道沿いに軒を連ねており、現在も古い町並みが残っています。

2 日本仏教の母山 比叡山延暦寺

最澄によって建てられた比叡山延暦寺は、その後、多くの名僧を世に送り出しました。その中でも、鎌倉時代に新たな仏教の教えを広めた法然、親鸞、栄西、道元、日蓮などは、みんな延暦寺で学びました。このことから、延暦寺は「日本仏教の母山」とも呼ばれ、1994年、世界文化遺産（古都京都の文化財）に登録されました。



① 比叡山延暦寺の根本中堂

ここに挙げた僧侶はどんな教えを広めたのか調べてみましょう。

3 日吉大社と山王祭

比叡山麓に位置する日吉大社は、『古事記』（712年成立）にも記されるほど古い歴史があります。主祭神は西本宮で祀られている大己貴神で、「大比叡」や「大宮」とも呼ばれています。天台宗を開いた最澄は、日吉社の神々を天台宗の守り神として祀りました。そのため、天台宗が日本全体に広まるとともに、日吉社も全国に建てられました。なお、日吉大社は日吉社の総本宮で、毎年4月12日から15日にかけて、7基の神輿が登場する山王祭が盛大に行われています。



① 日吉大社の鳥居

上が三角形になっているのが特徴的で、「山王鳥居」（「惣合鳥居」）と呼ばれています。

山王祭をビデオコーナーで見てください。

4 山門焼き打ちと坂本復興

1571年（元亀元年）、天下統一を目指す織田信長は、敵対する大名に味方した山門（延暦寺）の焼き打ちをします。この焼き打ちによって、たくさんの人々が犠牲になりました。その後、明智光秀が現在の下阪本の湖岸に坂本城を築き、坂本一帯を支配しました。坂本の復興が本格化するのには豊臣秀吉の時代になってからであり、江戸時代に入り徳川家康に引き継がれて、坂本の町は門前町としてにぎわいました。



① 坂本城の位置図

坂本城・大津城・膳所城が建っていた場所には、ある共通点があります。各コーナーにあるお城の位置図や模型をもとに調べてみましょう。

お お つ ひゃくちょう 大津百町

解説シートの太字の言葉の中から、興味のあるものを選んで調べてみましょう。

展示のポイント

「大津百町」とは、江戸時代にできた言葉です。現在の浜大津からJR大津駅までの市街地一帯と、大谷・追分あたりが範囲に含まれ、そこに100の町があったことから呼ばれたのです。江戸時代、大津百町は幕府が直接支配する土地で、大津代官が幕府に代わって支配していました。そして、東海道五十三次の宿場町、多くの船が出入りする港町として繁栄したのです。ただ、この繁栄は、江戸時代になる前、豊臣秀吉が琵琶湖に面して大津城を築き、城下町をつくったところにさかのぼります。ここでは、江戸時代の宿場や港町の様子、大津絵や大津算盤のことであわせて、大津城についても調べてみましょう。



① 札の辻の町並み 江戸時代の町並み。宿場町の町人の生活を、建物と人形で復元しました。

1 江戸時代の札の辻はどんな場所だったのでしょうか

模型の場所は、札の辻と呼ばれていました。なぜそうと呼ばれたのかというと、江戸時代、幕府がつくった規則を書いた木の札（高札）が立っていたため、「高札が立つ辻」→「札の辻」となったのです。また、この場



所は東海道と北国海道が交わる場所だったことから旅人も多く、それらの人のために荷物を運ぶ手伝いをする人や馬を提供する事務所もありました。

👉 模型で、宿場町らしい場所をさがしてみましょう。

👉 家の形を今の家とくらべ、違いを見つけてみましょう。

👈 歌川広重が描いた大津の宿場の風景
「木曾街道六拾九次」（本館所蔵）

2

港に出入りする船のルールを書いた高札



① 大津城主・京極高次の高札 1595 年（文禄 4 年）
重要文化財（個人所蔵）

大津の港は、江戸時代になる前、すでに豊臣秀吉が天下統一をするためにも大事なところだと考えていました。そのため秀吉は、大津百艘船仲間という組織をつくり、船が旅人や荷物を運ぶためのルールを決めたのです。この仲間は、江戸時代になっても、大津の港で活動を続けました。



このような高札を何点も展示しています。よく見ると、表側に釘穴があったり、裏側に溝があったりします。そのようになっているのは何のためでしょう。

3

大津城

現在の浜大津あたりには、豊臣秀吉が築いた大津城がありました。天下分け目といわれた関ヶ原の戦いがはじまる前、城主の京極高次が東軍（徳川家康軍）に味方をして大津城にたてこもり、関ヶ原方面に向かう西軍（石田三成軍）を足止めしました。そのため、戦いは東軍の勝利となったのです。大津城は、江戸幕府ができるのに大きな役割を果たしたのです。



大津の城が膳所に移されたあとに大津百町ができました。
百町の中の道が縦横に通っているのは大津城の城下町がルーツ？

➡ 大津城の推定復元図（本館所蔵）

4

大津の宿場で売られた大津絵と大津算盤

(1) 大津絵

大津百町の中でも、京都に向かう東海道沿い、大谷町や追分町の絵師によって描き、売られました。はじめは仏教に関する絵（仏画）でしたが、後には藤娘や鬼の念仏など、さまざまなキャラクターが登場しました。



大津絵は、藤娘や鬼の念仏のほかにもどのような絵があったのでしょうか？

(2) 大津算盤

1612 年（慶長 17 年）、大津一里塚町（現・大谷町）の片岡庄兵衛という人が長崎で、明国（中国）から伝わった算盤を持ち帰り、工夫をして作ったのが日本最初の算盤とされ、大津算盤と呼ばれました。今から約 300 年前の大津算盤や、算盤珠をつくる時の道具（両方とも大津市指定文化財）などを展示していますので、忘れずに見てください。



大津絵や大津算盤のほか、みすや針（縫い針）なども売られていました。



① 大津絵・鬼の念仏
（本館所蔵）

近江八景

解説シートの太字の言葉の中から、興味のあるものを選んで調べてみましょう。

展示のポイント

近江八景は、昔の文化人が、中国の「瀟湘八景」に憧れて、日本版の八景を選びはじめたことで生まれました。室町時代以降、琵琶湖や近江の国の名所から様々な八景が選ばれてきましたが（たとえば堅田帰帆、比叡山晚鐘など）、現在の組み合わせによる近江八景は、桃山時代の近衛信尹（1565～1614年）が完成させたものです。その後、近江八景は絵巻や屏風などに数多く描かれてきましたが、なかでも幕末の有名な浮世絵師・歌川広重は28種類の近江八景を描き、庶民の間に広まっていきました。それでは、もう少し詳しく紹介しましょう。

1 瀟湘八景

瀟湘八景は、約900年前にはじまりました。中国の湖・洞庭湖と、湖にそそぐ川、湘江・瀟水周辺で見られる八つの美しい水辺の景色を描いた、水墨画のテーマです。南北朝から室町時代にかけて名品が日本にもたらされ、その水墨画は室町時代の将軍や禅宗寺院の僧侶、公家や武家の間でも大変好まれました。その後、日本でも同じテーマの作品がたくさん描かれました。

洞庭湖は、中国ではとても有名な大きな湖。いくつかの名所や伝説があるので調べてみましょう。



① 瀟湘八景図巻のうち江天暮雪 尊證法親王筆 17世紀（本館所蔵）

2 近江八景の誕生秘話

近衛信尹が近江八景を選んだ場所は、実は膳所城だったという記録があります。信尹は、二代目の膳所藩主・戸田氏鉄に招かれ、膳所城の天守から琵琶湖や周辺の山々の風景を眺めました。その風景に感動して、膳所城から見渡せる名所を八つ選んで近江八景の和歌を詠み、絵も描いたのです。

信尹が選んだ八景は朝廷の公家たちに大好評で、雅な作品がたくさん作られました。そして、教養・文化を学ぶための江戸時代の教養書にも紹介されて広まりました。

	近江八景	瀟湘八景
秋	石山秋月	洞庭秋月
春・秋	瀬田夕照	漁村夕照
春	栗津晴嵐	山市晴嵐
夏	矢橋帰帆	遠浦帰帆
春・秋	三井晩鐘	煙寺晩鐘
夏	唐崎夜雨	瀟湘夜雨
秋・冬	堅田落雁	平沙落雁
冬・春	比良暮雪	江天暮雪



近江八景はそれぞれどんな場所にあるか、今はどうなっているか調べてみましょう。

3

歌川広重が描いた様々な近江八景

浮世絵師・歌川広重(1797～1858年)の名前は有名ですが、広重は生涯に、なんと28種類の近江八景を描いています。広重の仕事の中では、全国的に有名な「日本三景」(松島、天橋立、宮嶋)を描いた絵よりも圧倒的に多いのです。歌川広重の描いた近江八景の中で、とくに評価が高いのは、「保永堂・栄久堂板 近江八景之内」(1837年)と「魚栄板 近江八景」(1857年)です。



①「栄久堂板 近江八景之内」唐崎夜雨 (本館所蔵)



②「魚栄板 近江八景」瀬田夕照 (本館所蔵)



歌川広重が描いた近江八景は28種類ありますが、上の写真以外に、どんなスタイルの画面で描いているのでしょうか？

4

〇〇板 近江八景・・・とは

上の作品名でも「栄久堂板 近江八景之内」と書きましたが、タイトルの「〇〇板」とは、版元(板元)のことです。広重の近江八景作品はいくつもあり、「近江八景」「歌川広重」の名前だけではどの作品を指しているのかわかりません。そのため、「これは、版元〇〇所有の版本による作品」という意味でタイトルにつけます。版元は現代の出版社のことで、作品シリーズの企画・販売、浮世絵師や彫師・摺師(下絵のとおりに版木を彫ったり、色摺りをする職人)のまとめ、浮世絵師の新人発掘などを行っていました。また、売れ行きしだいでさらに追加で摺る権利、いわゆる版權(板権)を持っていました。近江八景だけでなく、浮世絵作品には、浮世絵師、版元、彫師(たまに摺師も)の名前がわかるようにハンコ(印)が作品にありますので、見つけてみましょう。



浮世絵以外で、近江八景をテーマとしたものにどんな作品があるか調べてみましょう。

膳所六万石

解説シートの太字の言葉の中から、興味のあるものを選んで調べてみましょう。

展示のポイント

徳川家康は、関ヶ原の戦いで勝った翌年の1601年（慶長6年）、大津から膳所に城を移しました。最初の藩主は戸田一西で、その後本多氏・菅沼氏・石川氏と代わりますが、1651年（慶安4年）に本多俊次が藩主となってから明治維新まで、代々、本多氏が就任しました。石高は最初3万石、その後7万石、1679年（延宝7年）からは6万石でした。ここでは膳所城の形や城下町の様子、膳所藩が支配していた地域の人々の生活、膳所焼、松尾芭蕉と大津の関係などについて調べてみましょう。



① 膳所城と城下 本丸・二の丸など、城の中心となる建物を復元しました。

1 今も残る膳所城の城門

膳所城は、1870年（明治3年）にこわされ、城門など城の建物は、膳所と周辺の神社などに移されました。その一つが膳所神社（膳所一丁目）の表門です。同神社の他にも城門などが移された場所があります。それらの建物には「立葵紋」と呼ばれる写真右下のような模様の入った瓦が屋根にのっています。この模様にも注目してください。



① 膳所神社表門 重要文化財

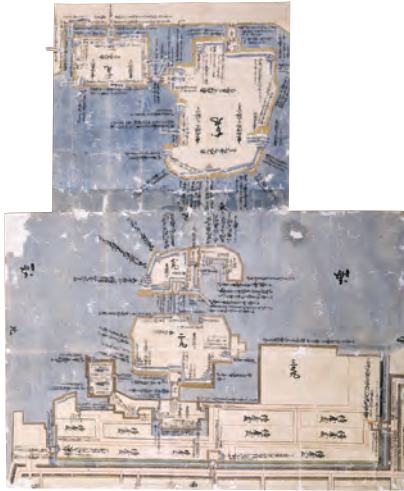


① 立葵紋の瓦（若宮八幡神社、杉浦町）

城の門や建物は、膳所神社のほかにはどこにあるのかを調べてみましょう。

2

膳所城は大地震で壊れたことがある



1662年（寛文2年）近江国ではマグニチュード7.6という大地震が発生し、膳所城も大きな被害をうけました。本丸などの形は、その後の復興工事で大きく変わりました。左の絵図は、下半分が地震の前、上半分（上下逆さまに描いている）が地震後に復興したときの本丸です。復興後の本丸は、桜まつりなどで知られる膳所城跡公園にあたります。



この大地震で葛川地区も被害をうけました。どのような被害だったでしょうか？



本丸のほか、二の丸や三の丸などの場所は、今どのようになっているのでしょうか？



膳所城絵図

滋賀県指定文化財（滋賀県立図書館所蔵）

3

膳所六万石の「石」とはどんな意味？

江戸時代の「藩」の規模を説明するときに、何万石という言葉をよく使います。「石」とはお米の量を表す昔の言い方で、1石は現在の約150kgです。藩が支配する農村で収穫される米など作物の量を表しています。農民は、収穫量のうちの何割かを年貢として藩に納めました。



膳所藩以外の藩、たとえば彦根藩などは何万石だったか調べてみましょう。

4

松尾芭蕉と門人たち



元禄時代の有名な俳人・松尾芭蕉（1644～1694年）は大津や琵琶湖の風景が大好きになり、何度もこの地にやって来ました。そのため膳所や堅田、大津百町には多くの門人（弟子）ができました。また膳所藩の領内にあった国分の幻住庵に住んだことでも知られています。芭蕉が大津でつくった句はたくさんあります。「行く春を（行く春や）近江の人と惜しみける」もその一つです。



松尾芭蕉の墓はどこにあるでしょう。なぜその場所にあるのでしょうか？



横井金谷が描いた松尾芭蕉 江戸時代（個人所蔵）

5

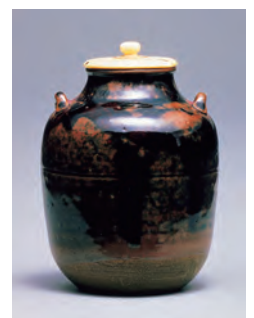
膳所焼

江戸時代の初めごろ、膳所藩の領内でつくられたやきもので、茶会などで使われる茶入や水指がとくに知られていました。大名で茶人としても有名な小堀遠州（1579～1647年）は、膳所焼をつくるのに深く関係していました。膳所焼美術館（京阪電鉄「瓦ヶ浜」駅をおりてすぐ）には、膳所焼のすばらしい作品がたくさん展示されていますので、ぜひ一度、訪ねてみてください。



茶入や水指は、なにに使ったのでしょうか？

膳所耳付茶入「銘 童女」（本館所蔵）



近江大津宮

解説シートの太字の言葉の中から、興味のあるものを選んで調べてみましょう。

展示のポイント

667年、中大兄皇子（後の天智天皇）は、近江の大津に都を移しました。中大兄皇子は、中臣鎌足らと協力して、唐の律令制度を取り入れた改革（大化の改新）をおこなった人物です。近江大津宮（大津宮）で即位して天皇となり、日本で最初の全国的な戸籍とされる庚午年籍を作りました。このコーナーでは、大津宮とその周辺の古代寺院、そして天智天皇の死後に起こった壬申の乱を紹介しています。大津宮に関連する遺跡や、出土した遺物にどのようなものがあるのか、調べてみましょう。



① 大津宮中枢部建物復元模型 内裏南門・正殿・後殿が一直線に並んで建てられています。

1 大津宮中枢部建物復元模型からわかること

大津宮があったのは5年と少しの間で、詳しい場所の記録も残されていないため、どこに造られたのか様々な説がありました。1974年以降、大津市錦織の発掘調査で、大きな掘立柱建物の跡が見つかり、これが大津宮の内裏南門や、天皇が住まう内裏正殿などの建物跡であったことがわかりました。模型では、現代の町並みの中に、当時の大津宮を再現しています。濃い茶色の部分が実際に発掘調査をおこなった場所です。調査されたのは一部だけですが、規則的な柱穴の並びなどを手がかりにして建物の全体のすがたが復元されています。

また、この模型では、宮殿全体の建物の配置は大阪の前期難波宮を参考に復元していますが、奈良の飛鳥宮とよく似た作りだったとも考えられています。今後、調査や研究が進めば、大津宮のすがたは、また違った形に復元できるかもしれません。

2

大津の古代寺院

大津市内には、大津宮の頃の古代寺院跡が多くあります。滋賀里の山中には天智天皇によって建てられたと伝わる崇福寺跡があり、発掘調査で舍利容器などが見つかりました。また、南滋賀町廃寺では、方形軒瓦という、この地域でしか出土していない特徴的な屋根瓦が使われていました。通常の軒丸瓦と形や模様の違いを比べてみてください。この他にも、穴太廃寺、衣川廃寺など多くの寺院跡が見つかっています。



崇福寺跡、南滋賀町廃寺、穴太廃寺、衣川廃寺は国史跡に指定されています。



① 崇福寺の舍利容器
国宝（近江神宮所蔵）



舍利とは何のことでしょうか？



② 方形軒瓦
大津市指定文化財
（近江神宮所蔵）



③ 復弁蓮華文軒丸瓦
大津市指定文化財
（近江神宮所蔵）

3

山ノ神遺跡の須恵器と鴟尾

大津市一里山にある山ノ神遺跡では、大津宮の時期に、須恵器や鴟尾を作った窯の跡が見つかっています。高い温度で焼き上げられた、灰色の須恵器は、古墳時代から国内で使われている器で、食器だけでなく、円形の硯などもありました。鴟尾は、しゃちほこのように、屋根の両端にのせるためのものです。大型の鴟尾4基が、完全な状態で出土することは珍しく、重要文化財になりました。



山ノ神遺跡の現地には、鴟尾を焼いた窯が復元されています。

鴟尾 重要文化財（大津市所蔵）



4

壬申の乱と瀬田橋

天智天皇は671年に亡くなり、後継ぎをめぐって、天智天皇の弟・大海人皇子と、天智天皇の息子・大友皇子が争う壬申の乱が起きました。大海人皇子が勝利して、天武天皇となり、都も再び飛鳥へ移されました。奈良時代の歴史書『日本書紀』には、瀬田川をはさんで両軍が戦ったことが記されています。その瀬田川の川底からは、7世紀頃の橋の跡が見つかりました（唐橋遺跡）。橋脚を六角形に組む特徴的な形で、朝鮮半島から伝わった技術で作られたと考えられています。模型では、出土した橋の構造と、その橋の上での戦いの様子を再現しています。



今の瀬田唐橋より約80m下流側に、古代の橋がかかっていた。



④ 古代の瀬田橋の模型